

第百四話 海軍陸戦隊、過酷な戦いで敢闘せり！

寡聞にして知らなかったが、明治初期（3～9年）には海軍に海兵隊が置かれていた。「強行移乗による制圧は時代遅れである」との理由で廃止された。その後、作戦上の必要性により陸戦隊が編成された。その陸戦隊には二種あり、海軍陸戦隊と特別海軍陸戦隊である。

1 海軍陸戦隊

必要に応じて一般の水兵を武装させて陸上戦闘に充てることがあり、これは海軍陸戦隊と呼ばれた。海軍陸戦隊は常設でなく、艦艇の乗組員から必要に応じ陸戦隊を臨時に編成するものとされた。西南戦争、日露戦争、第一世界大戦に参加し、また二・二六事件の際は、地域警備を担当した。列国の海兵隊同様、清国、中華民国における在外公館や居留民の保護に海軍陸戦隊が活躍した。義和団の乱、1920(T9)年の尼港事件(赤軍パルチザン部隊が邦人約6000名を虐殺)では全滅するまで戦い、在留邦人と運命をともにした。第一次上海事変では上海陸戦隊が編成され大規模な戦闘に投入された。他に、警備隊や防空隊等の陸戦隊が編成された。海軍独自の落下傘部隊は1942(S17)1月セレベス島メナドで日本初の落下傘降下作戦を敢行した。終戦前には本土決戦に向けて艦艇部隊などの多くが陸戦隊に改編され、総兵力は10万人に達していた。

2 特別陸戦隊

鎮守府などの陸上部隊の人員で地上戦闘部隊を作ることもあり、特に特別陸戦隊と呼んだ。建前は、臨時に編成される特設

上海事変を受けて1932年には「海軍特別陸戦隊令」が制定され、上海海軍特別陸戦隊は正式な常設部隊となった。5年後の第二次上海事変でも、上海海軍特別陸戦隊を中心に多数の陸戦隊が戦った。

特別陸戦隊にも二種あって、上海海軍特別陸戦隊の他に、「特設鎮守府特別陸戦隊」と呼ばれる部隊がある。この部隊は、上陸作戦や占領地の守備に任ずる専門の陸戦隊として運用された。戦争中には、目標地点占領後に、固定的な警備隊や根拠地隊へ改編されたものも多い。特設鎮守府特別陸戦隊は、戦争終結時には連合特別陸戦隊11個と特別陸戦隊54個が存在した。

特設鎮守府特別陸戦隊は、司令は中佐、モデル的編制は、本部中隊と銃隊2個中隊（各小銃4個小隊と機銃小隊）及び特科隊からなる歩兵大隊相当の編成であるが、実際の編制はかなり多様である。1000～1500人規模の例が多かった。中には砲兵隊や戦車隊、海軍空挺部隊としての編制をとるものもあった。装備は陸軍と共通だったが、仕様が変更された装備もある。教育は砲術学校で行われた。服装はセーラー服、状況に応じてカーキ色に染め直し最後は陸戦隊用被服が支給された。



特別陸戦隊配属は予備役など高齢者や身体能力に劣る者が中心で、人員の素質の面では優れているとは言えないとされる。上海海軍特別陸戦隊は、鎮守府所属ではなく上海に駐留するために編成された官衙たる常設部隊である。司令官は少将か大佐、複数大隊編制で特別陸戦隊と比べ大規模である。人員は各鎮守府から派出された。

参加作戦名：ウェーク島の戦い、メナドの戦い、ラビの戦い、ブナ・ゴナの戦い、ラエ・サラモアの戦い、ニュージョージア島の戦い、フィンシュハーフェンの戦い、タラワの戦い / マキンの戦い、マニラの戦い、硫黄島の戦い、沖縄戦

* ロートル部隊(失礼)とは言え、陸軍と同様の厳しい作戦に従事したものだ后感嘆する。日本人の殉国精神の発露であり、敢闘精神を讃えたい。